

蘇風柳多留全集一

自初篇
至一三篇

岡田

岡田甫校訂

誹風柳多留全集一

自初篇至一二篇

三省堂刊



誹風柳多留全集 一

昭和五十一年十一月十五日 初版第一刷印刷
昭和五十一年十二月一日 初版第一刷発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂

〒一〇一 東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三―三四四一（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

序

この柳多留全集は、川柳集「誹風柳多留」の初篇より、現在までに発見された百六十七篇までの忠実な翻刻を旨としたもので、全篇の活字化は今回が初めてである。「誹風柳多留」は、明和二年（一七六五）の初篇発行以後、天保十一年（一八四〇）までの約八十年間にわたってつづけられた長期出版であり、編集方式も一再ならず変転している。この間、異本、欠丁本、寄せ集め本などが横行し、底本とすべき良書の発見がきわめて難しいものが多い。従って明治以後、斯界の先覚者たちによって、長い間、地味な書誌学的研究もなされて来たのである。

その成果が顕著に現れ始めたのは昭和に入ってからで、岡田三面子博士の初版本の蒐集並びに後刷本（異本）との比較研究に負うところが多かった。昭和八年に刊行された影印本『誹風柳多留全集』上中下三冊は、監修者岡田博士を中心に、斯界の大家の総力を結集して成った労作である。画期的な出版ではあったが、後刷本の混入や錯丁の処理など、なお多くの問題が包含されていた。

岡田三面子博士のご研究は、博士の歿後、島根大学文学部教授水木真弓先生によって引き継がれた。特に「誹風柳多留」編集の原典となった川柳評万句合の蒐集並びに研究が進むにつれて、初期柳多留の句の多くの出典が漸次明らかにされたことは、特筆すべき成果である。水木先生歿後も、この方面の研究は多くの後継者によって、なお続行されていることは言うまでもない。本全集は、その成果を出来得るかぎり明らかにするであろう。

「誹風柳多留」の翻刻に当たって、もう一つ重要な基本的問題がある。それは、丁数がどのようにして整理されているかという点で、その点に關し、少しく解説をして置きたい。当時の雑俳集や柳書には、一貫した丁付のないもの、全く丁数を記していないものがしばしばある。錯丁などは問題にするのもおかしいくらいで、一句一句の鑑賞を主としたこれらの編著は、前後の倒置などさして問題にはならなかったのであろう。そして、柳多留百六十七篇までの中にも、こうしたものが決して少なくないという事実である。明治以後に活字化された柳多留集のほとんどが無丁であった。柳多留六十篇までを翻刻した国書刊行会本『柳樽全集』（明治四十四年刊『近世文芸叢書』八・九巻の合本）、三十一篇までを収載した名著全集本『川柳雑俳集』、二十四篇までを三冊に分刊した戦前の岩波文庫本『誹風柳多留』、これらはいずれも丁数を入れていない。底本に用いた原本のすべてに丁付があれば問題は

ないが、丁数の付していない原本を翻刻するに当たって、恣意的に丁数を加えることが許されるかどうか、いささか問題のあるところ、もし丁数を入れるとすれば、底本の選定はよほど慎重を期さなければならぬだろう。この間の事情を語るもつとも纏まった論考は、『やなぎたる研究』第百五号(昭和九年一月発行)に掲載された、水木真弓先生の「柳多留丁数考」である。これは前記、影印本『柳多留全集』の不備な点を鋭く指摘したばかりでなく、丁数記入のないもの、丁数の記載はあっても、一貫した丁付になっていない篇について、いくつかの試案を出されている。後年の『稿本柳多留全集』は、この「丁数考」を基礎として、さらに学問的に合理化されたものだった。

しかし、問題点がすべて解決されているわけではなく、校訂者の見識によって、あるいは意見をさしはさむ余地はいくらもある。丁数記入の歴史をたどれば、水木先生の試案以前からすでに行われており、その先鞭をつけられたのは、前記岡田博士であった。昭和五年刊の『謡曲と川柳』には、現行とほぼ同じ記号による出典が記されており、柳多留からの抄出句には、篇数のみならず丁数まで記したものが数多く見出される。また、同様の方式で雑誌に発表された論文もきわめて多い。そうした既成事実を踏まえた上で、自説に固執せず、先人の業績ともいえる丁数記入を無意義ならしめないように配慮された、水木先生の心遣いもまた尊重されてよいだろう。

とにかく現在の出典記入は、すべて水木本によって行われていることでもあり、校訂者も多少の意見は持っているが、そうした実情に鑑み、いたずらに混乱させることなく、丁数記入はそのまま水木本を踏襲することにしたのである。

戦後の古川柳研究界に、画期的な資料を提供した山沢英雄氏校訂の岩波文庫本『俳風柳多留』五冊(初篇〜二十四篇・索引付き)は、学問的な基礎研究の上に築かれたすばらしい編著であるが、基本的には「水木本柳多留」の一部といえることができる。このことは山沢氏自身、その例言に述べられている通りである。

岩波本発行後、水木本『稿本柳多留全集』は、校訂者の主宰する近世庶民文化研究所から刊行された。これは、岩波文庫本との重複を避けて、二十五篇から百六十七篇まで逐次発刊されたのであるが、当時の出版事情もあって活字化ができず、次善策として騰写印刷となった。昭和三十五年に開始され、同四十二年に完結を見たが、部数も少なく、一部研究家の書庫に収まって、市場に出ることはきわめてまれである。しかし、この全集本もお多くの問題を残していた。

柳多留研究に生涯を捧げられた水木真弓先生はその時すでに亡く、御令弟水木直箭先生の監修、御助力によってとにかく、この

遺稿の刊行を無事終了することができた。京都に於ける出版完了祝賀会の席上、直箭先生から、「泉下の靈もために祝杯をあげて喜ばれたに違いない」とのお言葉をいただいたが、その直箭先生も、今年(昭和五十一年)ついにみまかられた。

今回の出版も、やはりその意味で「水木本柳多留」の活字化にほかならない。水木先生の生涯にわたる御研究の成果が、本全集十二巻のうちに、脈々と流れているといつてよからう。

なお、微力ながらも校訂者としては、長年にわたる「柳多留」諸本の完璧な蒐集を期し、本全集においてその成果の一端を公にすることができるのは、水木先生の業績を補う意味でも、まことに喜ばしいことと考えている。その後、川柳評万句合の新発見による出典記入もあり、柳多留全集へ加えたい刷物も入手してある。柳多留二篇は数年前架蔵となったものに刊記が明記されており、従来、明和三年刊と推定されていたものを明和四年と訂正することもできた。

今回の出版に当たっては、校訂者架蔵本に加うるに、七久保博、八木敬一両氏の蔵本の中から初版本を選びすぐって、全篇にわたり数種類の諸本を対校できたことは幸いであった。以上の理由からいっても、本全集は、現在望み得るもつとも正確、かつ厳密な校訂本であろうことをいささか自負するものである。

柳多留全集十二巻に引きつづいて、全索引を作成する予定である。総句数十一万余、その索引が実現すれば、庶民文芸の一大牙城である『誹風柳多留全集』の利用価値もさらに倍加されるであろう。

本全集の校訂に当たって、原本校合は鈴木倉之助氏を専任とし、これを補うに八木敬一・佐藤要人の二氏を当てた。また校正は、もつとも厳密を要するものであるから、佐藤要人氏に依頼し、八木敬一・佐藤守・松村武久の三氏を補充して完璧を期した。索引は清博美氏を専従とし、前記諸兄の御援助を請う予定である。なお、多くの古川柳研究家の御支援と御助言をいただいたことを感謝している。

最後に浩漣な柳多留全集刊行という難事業を快く引き受けて下さった三省堂、きわめて面倒な組版・印刷に従事された明和印刷所の御尽力に対し、深甚の謝意を捧げる次第である。

昭和五十一年十月一日

校訂者 岡田 甫

凡例

一、翻刻は、底本のまゝを尊重する。

一、序文でも述べた通り、原本には丁数の記してある篇と、丁数の記してない篇とがある。例えば、本全集の第一巻では、初篇・二篇の二冊が丁付を入れていない。しかもほとんどの刊本に錯丁が認められる。これらは、岡田三面子校訂本を底本として丁数を付する前例を、本書でも踏襲した。従ってこれは仮丁である。仮丁のものは本文丁数の下に*印を加え、「……【初・21】*」のごとく記し、そのことを明示した。なお、原本丁付の誤刻並びに原本丁付を変更する必要のあった時は、原本丁数を()に入れて記した。

一、漢字を仮名に、また仮名を漢字に当て換えることはしない。変体仮名は、すべて標準仮名に改めた。但し、ハ・ツはそのまゝ残し別扱いとした。なお、変体仮名(標準仮名の場合でも)なのか、漢字の崩しなのか弁別し難いものもしばしばあり、それらは、前後の關係、熟字の構成などによって校訂者が独自に判断を下した。

一、清濁は底本のまゝとし、私に濁点、半濁点を加除しない。
一、仮名遣いは底本のまゝとし、歴史的仮名遣いに改めるこ

とはしない。

一、片仮名は底本のまゝの字体を残した。すなわち、子・モ・キはそのまゝとした。

一、特殊の連語体は、書簡に多く用いられるものだが、その視覚的要素が句の表現に微妙に投影するものもあるので、これは底本のまゝとした。

より(まいらせ候) もと(かしく) へ(より)

を(さま) と(こと)

連語体ではないが、いの文字は残した。なお、乙は也を使用した。

一、現代の漢字の用法から見て、明らかに誤りと思われるものも、底本のまゝにして、近代的「正書法」の意識による当て換えは行わない。また、今日の用法では誤りと認められても、当時はそれが一般的慣用であるものもある。これらは当時の『節用集』等に根拠を求め、慣用と認められるものには(マ、)の註記を施した。つまり、(マ、)とある文字は、当時の意識では誤字ではない、ということになる。例えば、小性(姓)、出陳(陣)、訴詔(訟)、大(太)神樂等である。

一、明らかな誤字・誤刻等も底本のまゝに残して、その右に校訂者が、かくあるべき字体を註記した。例えば、句当(句)、二日炙(炙)などである。

一、現代の辞書類に登載されていない、ごく特殊な難読文字、またこれに準ずる字については、校訂者の判断により、その右側に訓みを仮名で註記した。例えば、^(すそ)罍、^(くろし)鰯などの文字である。

一、楷・行・草の諸体によって筆記する際に生ずる無数の異体は、当時の『節用集』などの置き換えに基づき、その中で最も一般的な楷正体の一つ立てて、他はこれを以て代表させた。ただし、この楷正体は、必ずしも現行活字に於ける正字体とはならない。その例を左にあげる。

畫↑昼・昼 氣↑氣・氣・氣 鴈↑鴈 遼↑遼

卯↑卯 杓↑杓

一、『節用集』に於いて、一つの項目に併記されているものは、異体ではなく別体としての意識で書き分けられていたものと判断できる場合が多い。これらはすべて底本通りに残した。次にその一例をあげる。

吊↑吊 嫩↑娘↑嫁 罍↑罍 灵↑靈

糸↑絲 弁↑辨 松↑叢 槩↑概 風↑風

礧↑砧 欠↑缺↑闕 喀↑噓 厂↑雁↑鴈

一、註記、補記等、校訂者が私に付記したものは、すべて()に括り、底本の字とこれを区別した。ただし、

(1) 万句合の出典及び前句の註記

(2) 他篇・別丁における類似句との句形の異同

凡例

(3) 川柳評万句合及び他俳書における類似句との異同

(4) 寛政改革の影響と見られる改挿句の註記

等は、底本の字と混同の虞れは少ないので、そのままの形で註記した。傍註の句形の異同に△印を用いたところもあるが、これは、「あきの守時分ハ至極しんじや也」のように、柳多留拾遺には「の」の字が入っていないことを示す。他もこれに準ずる。

一、脚註は、句の出典を示し、重複句、類似句を掲載している本全集の他篇、別丁、また、同一句を撰集している他の俳書の書名と、その篇数並びに丁数を記した。川柳評万句合の略号は次の通りである。

寶九・義3 寶曆九年万句合、相印義三枚目

明元・信3 明和元年万句合、相印信三枚目

安二・仁4 安永二年万句合、相印仁四枚目

天八・滿1、雨譚 天明八年万句合、相印滿一枚目、作者雨譚

寛元・朝1 寛政元年万句合、相印朝一枚目

出典の下の記事・○▲×は前句の相印である。このうち

・印は原本は無印になっているもので、無印のままでは意味をなさないため、便宜的に加えた。前句は、板行毎の相印(天・滿・宮・梅・櫻・松・仁・義・禮・智・信・鶴・龜・叶等)の別によって句案に差異があるが、同相

印の場合は、板行の枚数すべてに共通である。従って、隣接句が同じ相印の前句の場合は第一句にのみ前句を付し、他を省略した。別の相印に距てられた場合は、改めて前句を記入することとした。

なお、相印は、安永三年万句合より形式的にところどころに○▲×を付するだけとなり、安永五年相印鶴よりは省略し、天明八年には前句をも省略するようになった。脚註の書名は、(一)と「」とに分けて記した。(一)は、柳多留全集に収まる柳多留の諸篇、および出典以外の川柳評万句合を明示するためである。「」は、これ以外の柳書の場合にのみ用いた。柳多留諸篇を示す略号は(四五・二)のごとく表記されるが、これは柳多留四十五篇二丁の意である。他の柳書については次のごとき略号を用いた。

〔武七・34〕 武玉川七篇三十四丁

〔末三・17〕 末摘花三篇十七丁

〔傍四・18〕 川傍柳四篇十八丁

〔筥一・4〕 柳筥初篇四丁

〔籠三・22〕 柳籠裏三篇二十二丁

〔藐・17〕 藐姑柳十七丁

〔玉・30〕 玉柳三十丁

〔拾七・15〕 柳多留拾遺『古今前句集』改題七篇

十五丁

一、行間に(改)として挿入されているのは、次に位置する句の改挿句である。寛政末年以後に刊行された後刷本に原句を削除して新たに補填された句を示す。改刷箇所は、柳多留初篇から二十九篇まで(二篇だけは改刷本は発行されていない)のいずれの本にも認められ、二十九篇(寛政十二年刊)の初刷本は改竄されていないわけであるから、以上諸篇の改版の行われたのは、寛政十二年以後と断定してよさそうである。なお、改版本で、一丁全部が削られているものもある。それらは本文中中央部の丁数を記した下に「(改版本は此丁削丁)」の註記を加えた。

一、出版当時の万句合所有者が、句の下に作者名を註記したものがこれまでもあった。その代表的なものが雨譚註万句合と称せられるものである。校訂者所蔵の新発見万句合には朱筆で作者名が記されていた。明和元年信三所掲の「けいさんが袋に入」とかんが出来」の句の下に「田安君殿」とあって、時代から勘案すると、歌人でもあり国学者でもあった田安侯宗武と断定出来る。この句は、本全集にないもので直接の関係はないが、まことに痛快な発見だった。作者名も、いくつかこれによって追加されたものもある。万句合から作者名の判明したものは、出典の下に註記した。

誹風柳多留全集一

目次

序	一
凡例	四
誹風柳多留	
初篇	一
二篇	三五
三篇	四九
四篇	七三
五篇	九七

六篇	三
七篇	一四
八篇	一六
九篇	一八
十篇	二〇
十一篇	二二
十二篇	二四
十三篇	二六

柳
多
留
初
篇

明和二酉年刊

序

ぞとてそのほかにあそこの
 隅にたの棚よりふるとしの
 前句附のすりものをさかし
 出し机のうへに詠る折ふし
 書肆何某來りて此儘に反
 古になさんも本意なしといへるに
 まかせ一句にて句意のわかり

安きを擧て一帖となしぬなかん
 つく當世諷風の余情をむす
 へる秀吟等あれハいもせ
 川柳樽と題す于時明和二
 西仲夏淺下の麓吳陵軒可有述



序

さみたれのつれくにあそこの
 隅こゝの棚よりふるとしの
 前句附のすりものをさかし
 出し机のうへに詠る折ふし
 書肆何某來りて此儘に反
 古になさんも本意なしといへるに
 まかせ一句にて句意のわかり

……初・山*

安きを擧て一帖となしぬなかん
 つく當世諷風の余情をむす
 へる秀吟等あれハいもせ
 川柳樽と題す于時明和二
 西仲夏淺下の麓吳陵軒可有述

印

五番目ハ同し作ても江戸産^レ

かみなりをまねて腹かけやつとさせ^{にせ(万)}

上ルたびいつかどしめて来る女房

古郷ト廻る六部ハ氣のよわり

ひよくの内ハていしゆにねたりよい

伴頭ハ内の羽白をしめたがり

鍋いかけすてつへんからはこにし

人をみなめくらにごぜの行水し

米つきに所を聞^ハは汗をふき^{ハ道をきかれて(万)}

……【初・2】*

すつぽんに拜マれた夜のあたゝかさ

齋日の連^レハ大かた湯屋で出来

入髪ていけしやあくと中の丁

百兩をほどけは人をしさらせる

じれつたく師走を遊ぶ針とかめ

九郎介ハ代句たらけの繪馬を上^{△(万)}

使者ハまづ馬からおりて鼻をかみ

梅若の地代ハ宵に定マらす

なげ入の干からびて居る間イの宿

寶七・八・二五
にきやかな事[△]

寶九・松1
こへい事かな[▲]

寶九・仁2
けつこよな事[△]

(さかみふり
・7川柳點)

寶九・信1
わつかなりけり[×]

寶九・禮2
たまし社すれ[△]

寶九・梅2
そんなさいな事[×]

1(寶十三・義

寶九・満2
とうよくな事[△]

寶十・櫻1
いさみ社すれ[○]

寶十・松1
心つよさよ[○]

寶十・禮3
おしみ社すれ[▲]

寶十・智1
まんかちな事[×]

寶十一・満1
そろり[×]

寶十一・櫻1
尤な事[×]

尤な事[×]

尤な事[×]

鞠場からりつはな形りてひだるかり

初ものが来ると持仏がちゃんと鳴^{ちゃん(万)}

こわそうに鋸の舛を持ッ女

唐紙へ母の異見をたてつける

すてる藝はしめる藝にうらやまれ

新發意ハたれにも帶をして貰ひ^{おやど(拾)}

内にかと言へはきのふの手を合セ

美しひ上にも欲をたしなみて

四五人の親とハ見えぬ舞の袖

……【初・3】*

天人もはたかにされて地もの也

いつとても木遣りの声ハ如才なし

身の伊達に下女か髪迄結て遣ッ

菅笠の邪广に成まで遊び過

片袖を足スふり袖ハ人のもの

お初にと斗姑^{姑を(三〇)}たてにとり

銅杓子かしてのろまにして返ッ

七種をむすめハ一ツ打て逆

赤とんぼ空を流るゝ龍田川

寶十一・禮1
すわり社すれ[▲]

きほ社すれ[○]

こほれたけり[△]

寶七・九・一五
わかまな事[▲]

ほしい事かな[○]

寶七・九・二五
むこひ事かな[○]

寶七・十・一五
つらひ事かな[△]

寶七・十・二五
にほひ社すれ[●]

はやり社すれ[△]

ひくい事かな[△]

寶七・十一・五
拙ひ社すれ[△]

うろたへにけり[●]

寶七・十一・一五
われも[●]

(三〇・五)

(二五八、
泉館)

まんちうに成ルハ作者も知らぬ智恵
取揚婆、屏風を出ると取まかれ
しかつてもあつたら禿炭を喰ヒ
水茶屋へ来てハ輪を吹日をくらし
ふんとしに棒つきのいる佐渡の山
主の縁一世へらして相續し
親ゆへにまよふてハ出ぬ物狂ひ
能事を言へハ二度と寄付す
初會にハ道草を喰ふ上艸履

……【初・4】*

喰つぶすやつに限ッて齒をみがき
子が出来て川の字形リに寐る夫婦
取次に出る貞の無イすゝはらひ
煮うり屋の柱ハ馬に喰れけり
りやう治場で聞ケハ此頃おれに化
足洗ふ湯も水に成ル旅戻リ
まゝ事の世帶くつしがあまへて來
朝めしを母の後ロへ喰ひに出ル
弁天の貝とハしやれたみやけもの

寶七・十二・五
かくし社すれく
たつね社すれく
かくし社すれく
寶七・十二・一五
もしやくとく
武二・一六
仕合なこく
寶八・九・五
こいしかりけり
ふとい事かな
寶八・九・一五
ゆるりくとく

んの入れけり
寶八・九・二五
はなれ社すれく
めいわくな事
こみ合ひにけり
めいわくな事
めいわくな事
寶八・天一
色くとく

三神ハなふるとよみし御すかた
いたゝいて受ケへき菓子を手妻にし
緋の衣着れハ浮世かおしくなり
太神樂斗を入れて門をメ
附木突腰におどけた拍子有
馬かたか居ぬと子供か藝をさせ
水かねてむねのくもりをといで置
袴着にや鼻の下迄さつぱりし
習ふよりすてる姿に骨を折

……【初・5】*

無イやつのがくせにそなへをてつかくし
國はなしつきれハ猫の蚤をとり
蔽入の綿着る時の手の多さ
武さし坊とかく支度に手間がとれ
勘當も初手ハ手代に送られる
五六寸かきたてゝ行ねずの番
新田を手に入れて立馬喰丁
どこぞでハあふなき娘ゆふべ遣リ
仕切場へ暑イ寒イの御挨拶

寶九・満一
りつは成けり
とうよくな事
おかしかりけり
おかしかりけり
とうよくな事
寶九・宮一
たしなみにけり

かざり社すれく
より合にけり
かざり社すれく
かざり社すれく
たひくな事
そんざいな事
よろこひにけり

(三〇・4)

紅葉見の鬼^(ハ)にならねはかへられす^(ぬ)

お内義の手を見覺るぬいはく屋

泣がけも尊氏已後ハ最くハず

しばらくの声なかりせば非業の死

いせ嶋の内ハあんまを尊トかり

役人の子ハにぎくを能覺^(き)めつかちハ大いめくらハむじくする^(二三・23)

女房カ有^(得手ハ)ルで魔をさす肥立きわ

鐘持ハむねのあたりをさし通^(シ)

白魚^(も)の子にまよふ頃角田川^(時)

……【初・6】*

帯解ハ濃おしろひのぬりはしめ

灯籠^(て)に基^(て)タくらひ言訳し

逆^(肩)カ王を貰ひに出たる料理人

花守の生^(レ)カハリカ奥家老

あかつきの枕にたらぬかるた箱

出てうしやうなんじ元來みかん籠

ニヶ國にたまつた用の渡りそめ

鼻紙て手をふく内義酒もなり

病上りいたく事かくせになり

寶九・梅1
重本社すれく

▲【武五・17】

〃・梅2

寶九・櫻1
うんのよい事く

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

寶九・松1
やさしかりけりく

〃・松

〃・松

〃・松

〃・松

〃・松

〃・松

〃・松

寶九・仁1
めつたやたらにく

〃・仁

〃・仁

橙ハ年神さまの疝氣所

合羽箱どろくくとかしこまり

定宿^(常)を名乗てひといい場をのがれ

井戸かへに大屋と見へて高足駄

立白^(ハ)に天狗の家をきりたをし

禪寺ハひがんの錢にふりむかず

たそかれに出て行男尻知らす

隣から戸をたゝかれる新世帯

うりものと書て木馬の面ヲへ張

……【初・7】*

むかしから湯殿ハ智惠の出ぬ所

神代にもたます工面ハ酒が入

盃^(ハ)にほこりのたまる不得心

跡ト月をやらねは路次もたゝかれす

指トの無イ尼を笑へは笑ふのみ

鉢巻も頭痛の時ハ哀なり

ぼた餅の精進落ハいのこ也^(も)

穴ぐらで物いふやうな綿ほうし

急度して出る八朔は寒く見へ

寶十・櫻2
目立社すれく

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

〃・櫻

寶十・宮2
めつそな事く

〃・宮

寶十・梅1
手傳にけりく

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

▲【拾初・23】

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅

〃・梅